

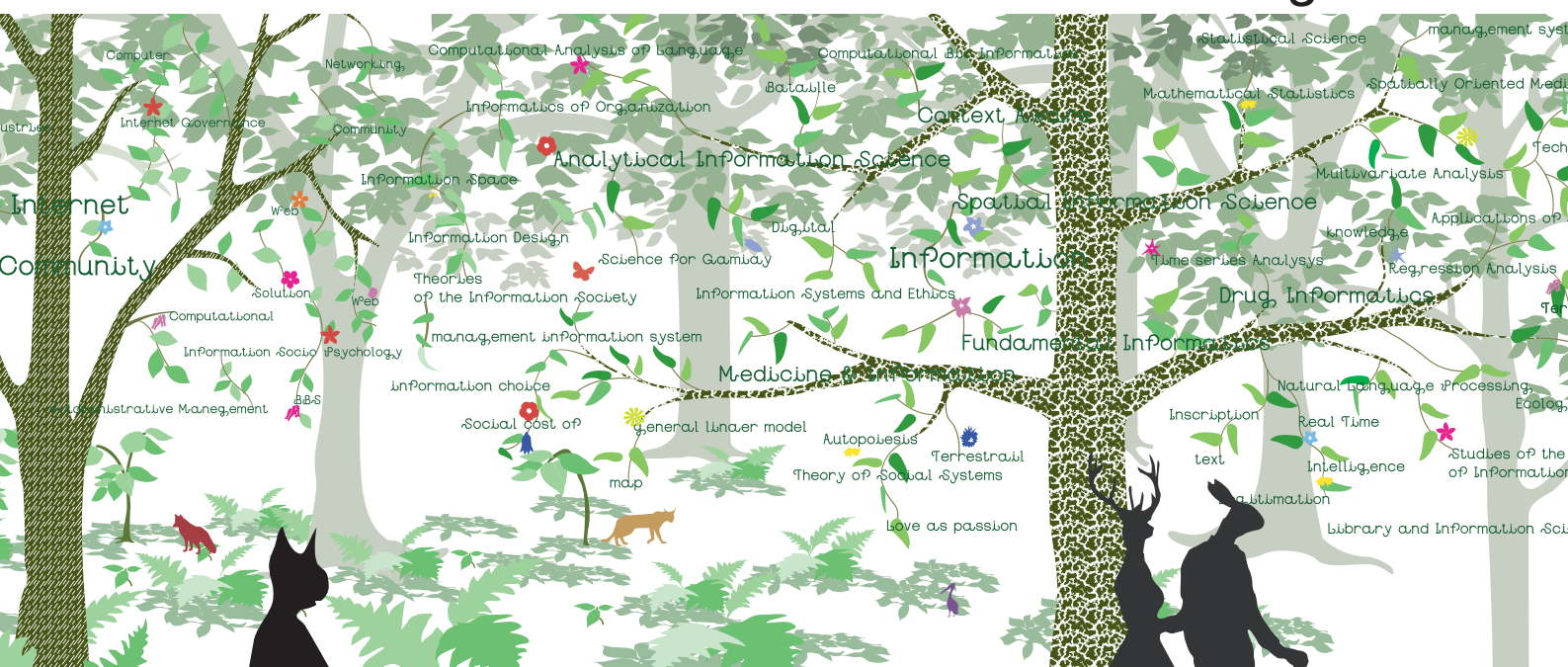
学環学府

東京大学大学院情報学環 学際情報学府



Number
18

Thinking Forest



須藤修vs情報爆発

須藤 修 教授 インタビュー

政府の審議会や委員会でも活躍される一方、日ごろは冗談を好み周囲には笑いが絶えない須藤修教授。最先端のプロジェクトの一端をお話しいただいた。



Q 研究は複数の領域にわたられていますか？

今日は科研費のプロジェクトでやっているものを紹介させていただければと思います。これは、総額約30億円の研究プロジェクトで、科研費の情報領域では最大規模のものです。情報爆発時代に向けた新しいIT基盤技術の構築を目指す巨大プロジェクト（科研費補助特定領域研究、領域代表：喜連川優東大教授）です。

このプロジェクトにはコンピューターサイエンスの方々の研究グループが三つあります。高速演算で、しかも省エネのコンピューターシステムや、Googleをしのぐサーチエンジン、新世代対話エンジン搭載

のロボットの開発などしてくださっています。僕は、そこで開発されたテクノロジーをうまく社会システムの中に組み込んで応用可能なものにしていき、実際に社会に貢献するような、社会科学的研究と工学的な研究をミックスしたセクターを統括しています。

僕なんかも平日は一日にメールが300通以上来ますが、2000年以降、幾何級数的な情報量の増大があります。この情報爆発時代における安全・安心な新しい社会システムをどうやって創るかという研究です。ITは個別に作るのではなく、社会システムを考えて、そのきちんとした枠組みの中にビルトインして開発をする。それがどういうふうに使われ、どう進化させるかというビジョンも描かなきゃいけません。それが今求められています。

Q 今一番重視しているのは？

医療のあり方、その中でも予防医療です。医療・福祉システムのイノベーションについて研究を深めたい。医療分野は制度的にいろいろな問題があることが指摘されています。先進国は高齢化が進行し、このまま行くと医療費は破綻します。ITによる医療の構造改革が必要です。

たとえば糖尿病はアジア諸国では2025年までには1億5,600

万人まで拡大して、2003年と比較して増加率は91%に増加すると言われています。病気になるためには保健指導が必要ですが、これはマンパワー的に困難だし、ノウハウも十分には共有されていません。電子データがあまり蓄積されていないから、うまくデータを処理して適切な指導まで持っていけないんです。

そこで今、福岡で健康管理センサーネットワークの実証実験基盤を作っています。産官学が連携をして実験をやる直前まで来ています。まず糖尿病の患者さんにセンサーチップをつけてもらいデータを集めます。センサー、特に加速度センサーが重要です。加速度センサーとは、振ると画像が動く任天堂のWiiの医療版だと思ってください。血糖値、心拍数、体重、運動量、カロリー消費量、体温などいろいろなもののデータを取り、高速演算をする巨大コンピューターにネットで送り、データ処理をして、総合的に捕らえて高度な判断をしようとしています。そうすると証拠にもとづいた正確な相関を明らかにできるのではないかと期待しています。たとえば部屋の間取りと健康状態の相関、北向きの部屋だと病気になるやすいとかね。患者の方、被験者には携帯を使って音声と文字情報の両面からデータを送り、指導もできればと考えています。そしてまた、そのデータは蓄積して医療の最適化に役立てます。一人一人に最適化した医療、1to1の対応を目指しています。お医者さんも科学的根拠がないとその対応はできませんから、そのバックボーンを作り、患者さんにインフォームド・コンセント、意思決定支援をする体制を作りたいですね。

今、東京実験も準備しているところです。携帯の中にセンサーチップを入れて持ち歩いてもらい、今までは発見できなかったような、まったくごみのようなデータを集めて解析をして構造化して新しい知見を作る。それによってこれからの医療に貢献したい。この研究プロジェクト（情報爆発IT基盤）は、総合科学技術会議の委員の方からわが国の最も注目すべき研究のひとつだという評価をいただきましたし、ビルゲイツに話したら大変注目してくれました。

Q 大変お忙しいようですが、乗り切る秘訣は？

アメリカの競争力委員会がイノベートアメリカという報告書の中で、異分野の交流を通じて初めて形成される創造力を作り出すということを行っています。僕も、多分野に跨っているいろいろなことで構想力が増すというように考えています。学環とも共通していますよね。ただ、体力と時間の問題もあります。実際のところホント困っています。理系の先生たちがやるようにチームプレーが重要ですが、チームを編成してマネジメントする労力もまたかかります。最適チーム編成って言うのはどうしたらいいのかって言うのは日々考えていますけどまだ明確な解って言うのはないですね。

東京大学創立130周年記念事業
情報学環・福武ホール工事中景「かんがえる森」

Thinking Forest

Supported by **TOPPAN**

工事壁をメディアに

Thinking Forest (TF)は、新校舎設立に向けて学府院生たちによって構想されたメディア表現プロジェクトである。アーバン・スケープ・アーキテクトとして活躍する韓亜由美(佐々木研)を中心に、「情報学環・福武ホール」工事壁を、生きた、知のメディアへと変容させる。第1弾として「image-forest」(i-forest・6/4-6/9)が開催され、第2弾「keyword-forest」(k-forest・6/18-今秋)はただ今進行中である。

i-forest

屋外でメディア・アート (Director 情報学環特任助教 鈴木太郎)

カメラで動きを感知し、道行く人々の動きに彩りを添えるメディア・アート作品を工事壁に投影。他にも遺跡を3次元映像として再現した作品、学環カルタ大会映像等、学環ならではの趣向溢れる作品が、高さ3mの壁に同時上映された。期間中はカフェを併設、i-forestは知的交流の場=サロンとしても展開を見せ話題を呼んだ。最終日は雨による中断もあったが、サイエンスクラブが華やかにフィナーレを飾ってくれた。

i-forest 出展作品:

- ・Bayon Digital Archive Project: 鎌倉真音、大蔵苑子 (池内研)
 - ・「風、知。」: 白谷栄梨子 (荒川研)、情報学環助教 有賀清一
 - ・「Linear Shade」: 八木真一郎 (河口研)
 - ・「色景」(irokage): 赤川智洋 (河口研)
 - ・「学環カルタ大会ドキュメント」: KARUTAチーム 代表: 平井裕二 (西垣研) サイエンスクラブ 代表: 田中舞 (佐倉研)
- 共催: 情報学環 コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム



photo: momoko japan



k-forest

有機的21世紀的知の生態系「知の森」 (Director 韓亜由美)

学環関係者から収集した約800の研究キーワードを元に、工事壁を「知の森」へと変容させる。ゆるやかに紡がれる学環の知のありようを、森の生態系になぞらえ可視化した。学環関係者には動物のシールを、来場者には花のシールを配布。それらを森に配置してもらいながら、知の森林浴を楽しんでもらいたい、そのような想いでk-forestは構想された。

「知の森」は秋にはどのような姿で何を伝えてくれるのか。学環クロニクル、最後の最後まで目が離せない。

k-forest:

Clustering: 椛本輔 (西垣研)、加島卓 (北田研)、溝尻真也 (北田研)、林三博 (吉見研)、久松慎一 (本学機関研究員)
協力: STUDIO HAN DESIGN



Thinking Forest + Ubiquitous Media Asian Transformations = ∞

「U-MAT」開催に際して、国内外から集まる著名な研究者たちもk-forestに参加?!これらの動向を含め、TFの詳細は下記サイトを参照ください。

<http://thinkingforest.info/>

「電通コミュニケーション・ダイナミクス寄附講座」始動

東京大学大学院情報学環は、株式会社電通から5,000万円の寄附を受け、「電通コミュニケーション・ダイナミクス寄附講座」を設置しました。この講座における研究教育活動は、情報学環の若手研究者を中心に、平成19年度から平成21年度までの3年間にわたって実施される予定です。

急速な情報通信の技術革新やメディア産業の変化、情報のコピキタス化、人々のメディア消費行動の変化等により、社会におけるメディアやコミュニケーションのあり方は、これまで経験したことのないような大きな構造変革期を迎えつつあります。すでに、これからのメディアの価値創出の基盤となる様々なステイクホルダーの交替や相互の関係性が変化しており、メディアがこれまで有していた経済価値や社会価値等の変動が生じつつあります。今後長期に及ぶであろう大変動によって、新しい多様なコミュニケーションの可能性が開かれていくことが予測されます。

本寄附講座では、このようなメディア環境・コミュニケーション環境における大きな構造変化を背景に、メディアや広告が担う経済価値の変化、人々のコミ

ュニケーション行動やメディア文化の変容、メディア制度の変化、さらに、情報発信の倫理やジャーナリズム、情報通信技術と社会の関係のあり方などを、総合的な視野にたつて研究を進めていきます。

本講座では複数のプロジェクトが構想されていますが、テーマが総合的なことを踏まえて、電通だけでなく、新聞・雑誌・放送業界、通信・ネット業界、広告主企業などへも協力や参加を働きかけていく予定です。(准教授 石崎雅人)



電通最高顧問成田豊氏はじめ電通の方々と研究教育活動にかかわる学環教員

これが学環・学府だ! — 学府修士課程入試説明会レポート —

平成20年度入試説明会が、5月19日(土)に工学部新2号館にて催された。このイベントは、情報学環が社会情報研究所と合併した頃から、新しい学環を広く紹介したいと、ビッグネーム勢ぞろいの大きなシンポジウムが企画されてきたが、徐々に受験生に目を向けた構成に変わってきた。本稿では、今年の説明会を印象に残ったキーワードを基に綴ってみたい。

最初に、吉見学環長が「天下の東大の奇跡」として学環の全体像と急激な発展を熱く語り、池内専攻長は「泣く子も黙るコピキタス!」「雨後の竹の子」などお茶目な形容詞を駆使して、学環の枠組みの魅力を変えた。そして、山内先生が今年度完成する新しい



鼎談に聞き入る参加者たち

拠点は「理想の教育棟」福武ホールを「学環の奇跡」として披露した。また、ホール完成までの工事壁を利用したアート「Thinking Forest」が院生によって紹介されたが、このような院生の参画

は受験生には大きな魅力として写ったに違いない。

続いて、橋元・佐倉・池内・坂村各コース長の人柄が表れる独特の説明があり、「インド哲学からコピキタスまで」文理を越えた幅広い構成がよく理解できた。学生・留学生委員会の本郷・北田先生は院生とともに、学府院生の出身大学・教育内容・就職先などのデータから、社会人・留学生・女性が多いユニークな集団であること

を紹介した。そして、卒業生の葛西由美子氏と飯田豊氏を迎えての鼎談は、佐倉先生が初期院生の苦勞や楽しさなどをうまく引き出してくれた。中でも、既存の学際領域で発表の場を確保しながら新しい領域を開拓するという、まさに「パイオニア的精神」が紹介され、それは今も脈々と続いているのだと確信した。

ここまで、学環の魅力爆発のアピールであったが、次の入試説明会で受験生は突然夢から現実に引き戻された。コースごとに微妙に異なる入試システムを淡々と説明する澤田入試委員長は「海猿」の危機管理にイメージが重なった。

そして、志望教員との直接の対話の場「学府めぐり」は、研究室出展数が昨年の倍以上あり、受験生のみならず在学生や教員同士の交流もみられ大変盛況であった。これは、学環の定番イベントとして確固たる地位を作りつつあるといっても過言ではないだろう。

今年は、例年よりも約1ヶ月早い企画であったが247名もの参加者があった。後は、ユニークで質の高い受験生が多く挑戦してく



盛況だった学府めぐり

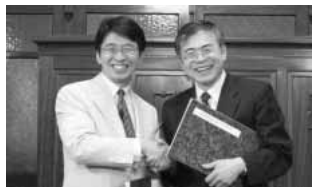


院生と北田准教授による学府紹介

れることを期待するばかりである。末筆であるが、準備に奔走した企画広報委員・入試委員・院生、そして事務長はじめ学務係の皆様へ感謝したい。(企画・広報委員長:深代千之)

台湾大学社会科学院と 交流協定締結

6月4日、情報学環と国立台湾大学社会科学院との研究・学生交流実施覚書調印式が台北市内の台湾大学キャンパスで行われた。台大側は趙永茂院長、許介麟前院長、彭文正新聞研究所長ほかが出席。東大側は、吉見俊哉学環長ならびに林香里准教授が出席した。吉見学環長が挨拶の際に、ポスト冷戦の東アジアにおける地理、文化、歴史の近さを述べたうえで、今後この地域における学問の連携、創造、および共存が一大課題であると強調。両校がさまざまな研究分野において交流を深めていくことに大きな期待を寄せていると述べた。約1時間におよぶ調印式は、双方の記念品贈呈をもって円満に終了した。(林研D3・林怡臻、日本側通訳および取りまとめ)



会議資料電子化本格運用へ —紙資源節約への取り組み始まる—

2006年度末に吉見学環長が提案された会議資料の電子化・オンライン配布を実現するため、情報学環情報ネットワーク委員会は、オンライン情報共有システムを構築し、5月から本格的な運用を開始しました。このシステムは、2006年11月から情報基盤センターとの共同PKI実験で利用しているICカード・USBトークンとデジタル証明書を用いることでユーザ認証の信頼性を高めつつ、CMSベースのウェブサイト等を利用して資料の掲載や修正、説明の付加等を容易にしています。また、PKIベースの暗号化仮想ドライブやS/MIMEによるメール暗号化などを併用することで、オンライン共有の前後段階も含めたセキュリティ確保にも配慮しています。事務の皆様のご協力を得て、紙資源節約にもつながる、学内でも先駆的な試みが進められて

います。(情報ネットワーク委員長・原田至郎)

留学生ガイダンス報告

5月29日(火)、留学生を対象としたガイダンスが開かれ、とくに留学生のみなさんが困っていること、疑問に思っていること、学環に望んでいることを率直に話し合った。提起された話題は次の通り。(順不同)

- 授業の時間割に、文化交流の時間を設け、様々なことを話し合いたい。
 - 留学生と積極的に意思の疎通を図りたい日本人学生の組織を作ってはどうか。
 - チューターは研究室を超えて募集したらどうか。チューターのオリエンテーションも実施して欲しい。
 - 留学生のインフォメーションサイトを開設してはどうか。
 - 留学生の名簿をつくってほしい。
- 実現できそうなこと、慎重な話し合いが必要なこと、様々であるが、留学生委員会は今後も留学生の皆さんのナマの声に接していくよう努力したい。なお、ガイダンス後、懇親会が開かれ、吉見学環長・教員・日本人学生も参加し、親交を深めた。(留学生委員長・本郷和人)



東京大学21世紀COE 「次世代ユビキタス情報社会 基盤の形成」 第12回シンポジウム 「ユビキタス情報社会基盤と 国土交通イノベーション」開催

去る5月16日に本郷キャンパス安田講堂で、東京大学21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第12回シンポジウム「ユビキタス情報社会基盤と国土交通イノベーション」を開催しました(主催:東京大学21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形

成」、東京大学大学院情報学環、国土交通省)。まず最初に安富正文・国交省事務次官、及び坂村健・教授による基調講演、宿利正史・国交省総合政策局長による国土交通イノベーション推進大綱策定の報告を頂いたあと、坂村教授の進行で、谷口博昭・国交省技監、石澤直孝(株)MTI、杉本陽一(株)パソコ社長をパネリストとしたディスカッションを行いました。今回は、1,000人以上の参加者を集め、大きな安田講堂が満席になるなか、非常に活発で熱気にあふれたシンポジウムとなりました。(准教授 越塚登) URL: <http://www.ubinsoc.org/>



プロジェクト「メルプラッツ」始動

2005年度に5年間の活動を経て終了したメルプロジェクトを継承しつつ、メディア表現とリテラシーについて、ともに語り合う広場としてメルプラッツがスタート。7月21日(土)にオープニングイベントを開催予定。(准教授・水越伸)問い合わせ先:
<http://www.mellplatz.com>
URL:<http://www.mellplatz.com/>

トヨタ財団後援アジア隣人 ネットワーク・シンポジウム

3月29日から31日にかけて、「中・韓・日ジャーナリストとの対話:いま、東北アジアの言論空間を考える」が開催された(トヨタ財団後援)。中国(『中国青年報』、『南方週末』、『黒龍江晨报』)、韓国(『プレシアン』、『時事ジャーナル』、『韓国文化日報』)、日本(共同通信、『北海道新聞』、『信濃毎日新聞』、『高知新聞』)から、それぞれ現役若手記者が参加した。初日2日間は、高齢者介護施設や自衛隊広報センターの見学などを行った。31日のシンポジウムは、姜尚中教授が「東北アジアの市民的公共圏とジャーナリズム」基調講演。その後吉見俊哉学環長、野中章弘アジア

レス・インターナショナル代表、隈元信一朝日新聞論説委員を交えたジャーナリストたちとのディスカッションなど。司会は林香里准教授。東北アジアにおける民主主義とジャーナリズムのあり方について考えさせられる3日間だった。(准教授・林香里)

戦中・戦後『アサヒグラフ』 贈呈に対する感謝状授与

5月17日篤志家高木五郎氏より、戦中・戦後『アサヒグラフ』その他23冊が寄贈され、吉見学環長より感謝状が授与された。



高木氏の祖父王太郎氏は青山学院第4代学院長。母方の祖父外交官内田定雄の住居は港の見える丘公園で「外交官の家」として公開されている。寄贈された雑誌類は父高木一三氏(東京農工大教授)が購読、五郎氏も共に読んでいた。戦中時氏は中学生。B29が空から撒いた伝単「マリアン情報」をドキドキしながらこっそり持ち帰った記憶があるという。



学環図書館は『アサヒグラフ』の所蔵が充実しているが、それを増補する形となった。またこのコレクションは来歴が明確で資料的価値も高い。研究室では、新しい観点からメタデータを付し新たなアーカイブシステムの対象とする事も考えている。(馬場研M2・青木淳子)

受賞報告

3月15、16日、学術総合センター一橋記念講堂にて、人と人工物、および人工物を介した人と人のインタラクションに関する研究成果一般を対象にした「インタラクション2007」(主催:社団法人情報処理学会、大会スポンサー:マイクロソフトリサーチ、グーグル)が開催され、吉野祥之(苗村研・M1)、苗村健准教授:「u-soul: 超音波を用いた音像定位インタフェース」がインタラクティブ発表賞を受賞した。[インタラクション、A-122, pp.69--70 (2007.3)]

BOOK



「情報倫理の思想」

西垣通/竹之内禎 編著訳/
NTT出版

2005年12月オックスフォード情報倫理会議の報告から、情報社会の倫理をラディカルに問う哲学的議論を編集。フロリディアの情報圏、カプーロのデジタル存在論、エスの解釈的倫理多元主義、西垣の基礎情報学的アプローチ、竹之内の情報エコロジー論を採録。



「コミユナルなケータイ —モバイルメディア社会を 編みかえる—」

水越伸 編著/岩波書店

今の日本では、ごくプライベートな使われ方とビジネスライクな使われ方に二極化してしまったケータイ。この閉塞を打ち破るため、私たちが自律的に関わることのできる「コミユナルな空間」としてのケータイの可能性を、さまざまな実践的なプロジェクトで探求した。



「地域SNS—ソーシャル・ ネットワーク・ サービス— 最新編 Web2.0時代の町おこし 実践ガイド」

庄司 昌彦、三浦 伸也(吉見研・D2)、須子 善彦、和崎 宏著/
アスキー

これまでの地域SNSの現状を整理し、地域社会とSNSの関係性について事例ベースで考察し、他の地域情報化事例との比較などを行った一冊である。



学環学府 Number.18

**Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of the University of Tokyo**

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行:2007年7月 編集委員:深代千之・林香里・吉海智晃・前波奈保子

表紙画像:“考える森”はたいま進行中~皆様のご参加で森が変化します。

e-mail:news@iii.u-tokyo.ac.jp URL:http://www.iii.u-tokyo.ac.jp